清水道中金毛草鞋 四

木曾路

逍遥文庫
文庫6
1004
4

方言修行金草鞋　四編　木曽路巻

奥州山家の狂士なにがし東都より伊勢参宮の紀行をかねて京
大坂見物の旅行を編集して梓にのぼせしより今またその
帰路を木曽街道にまはして編をなし書肆の需にまかせて
かさねて此巻を著せよと書肆が懇望に応じて筆をとらし
あるはくらべても重箋を専とせしてまた世の風と悦ばしく
聊が街道をみちびきて名所古跡に狂歌を加へ滑稽を旨とし
読とく人の助けにそなへると云まで前編のおもむきなり
于時文化癸酉初春　書肆にあたる

道中膝栗毛の末編を此度本篇とす

此街道をもれて岐蘇の旅人をもて東海道と北陸
道の中間なればなりと中山道と称し信州のうちを
木曽路とは号しぬ貝原益軒の木曽路の記にくはしく
あそび出かけて勝地の数をつらね古雅の風土人情も上古の遺風
を忘れず諸国を懸けるは此街道の旅にあらず

道中膝栗毛上

十返舎一九戯著

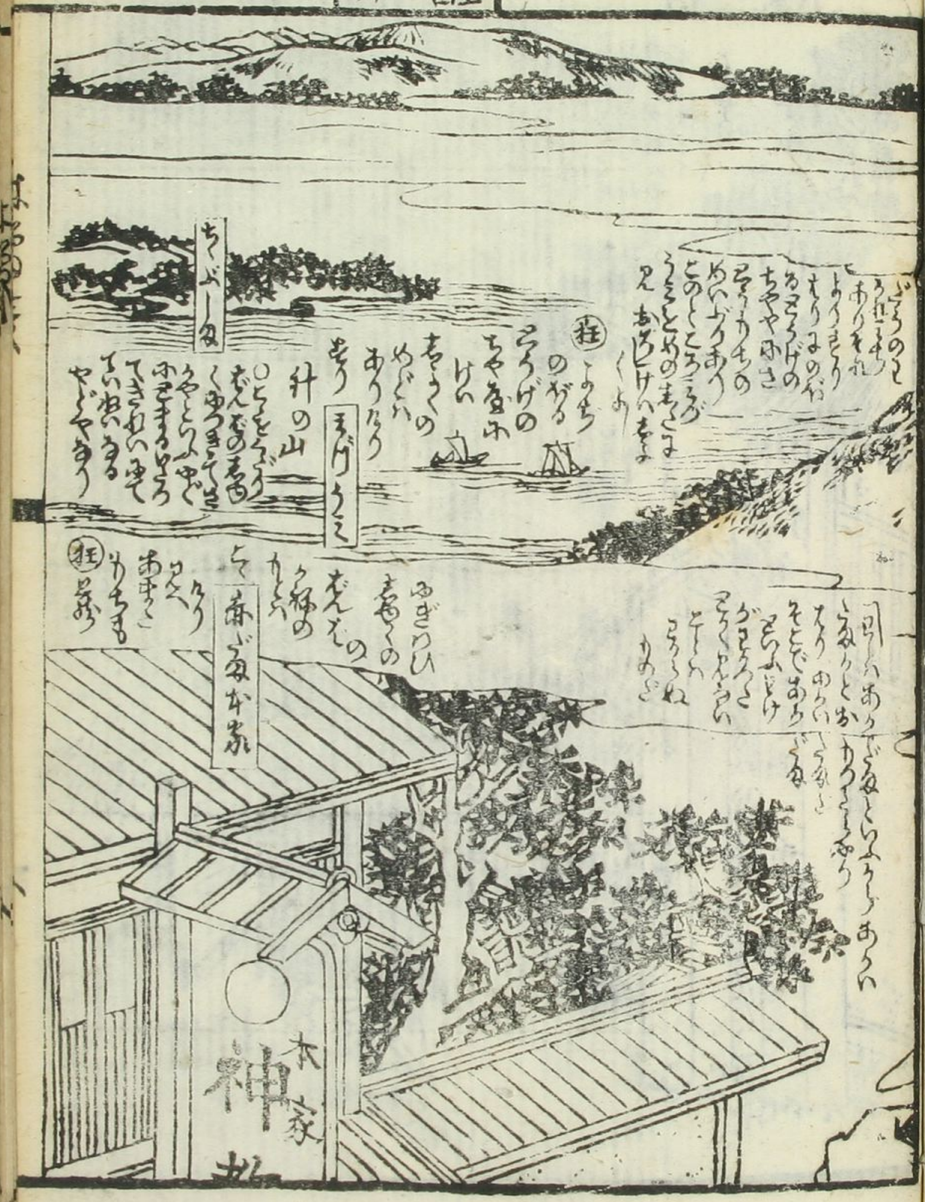
大津
草津

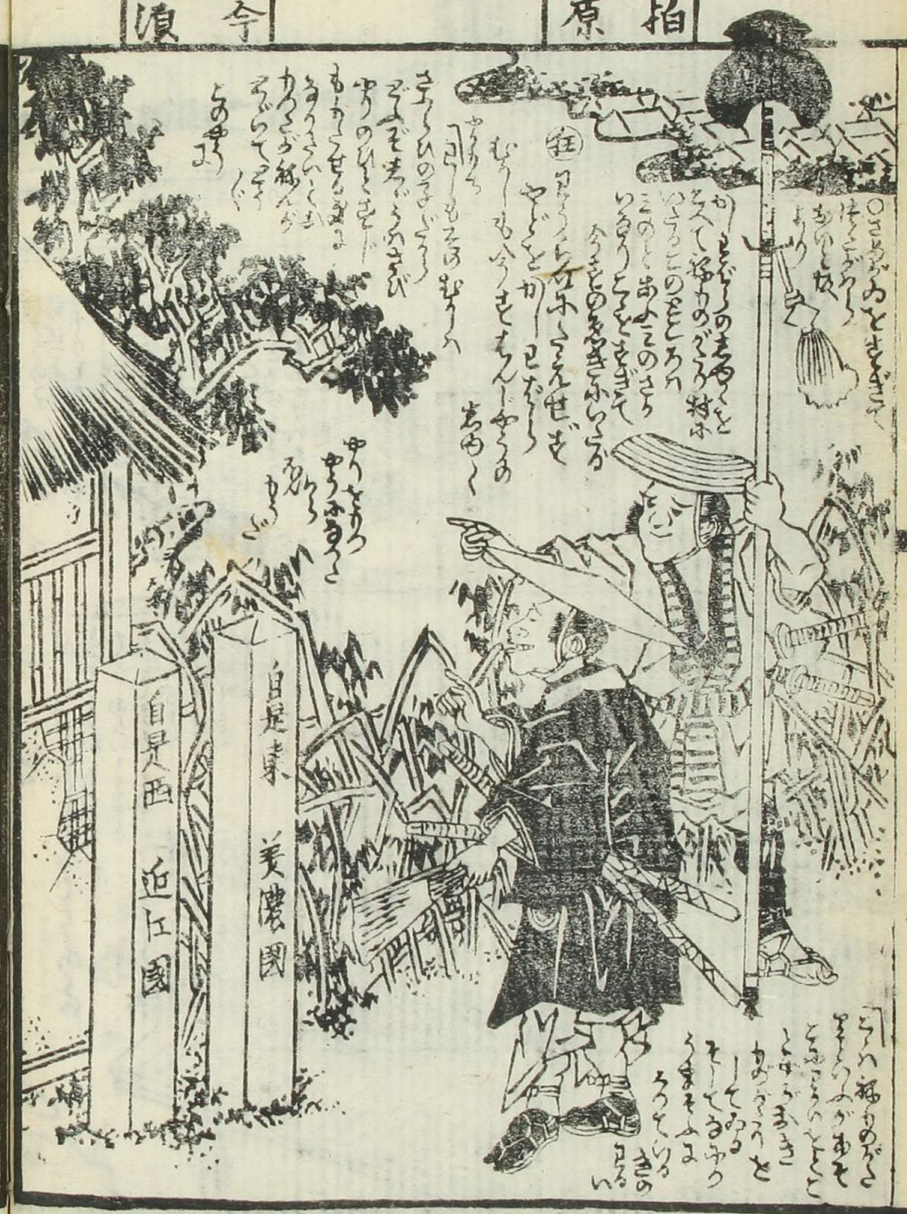
かう山

武佐
かみ宿

越知川宿

高宮
高
根元
高宮屋




自是東　美濃國
自是西　近江國

福屋

右

それよりいにあるのの
今ぐんをんこのごとろ目の
まくみはそ川のるぐれを
えおろーはのまろうぐど
がぜきそぐどちて
うをを者をるたときの
大のこありのろてぜろけへの
ごころるりうををきてあ
どのひとろやらふを至あう
それよりうをの者くるつく
(注)尺、ともの〜けのうをの
おおれせのるさけも
ひく秋ぎうど
はれるき

大當
やつこや

十三峠の畫

○大くまの名まことにいでゝさのぎ山こゑ
のぞりこれよりくよこうそげのなしまし
ゆうかたもざくなまもくそうげよろ
くぐそうのぎくはるまこうい己ぎち
ぐえくくくぐうのきつ

(狂)　松風のあき月八こてふひき
ひさきて雲間のいとめ　ナこうそうげ

○このとうげくのくそてむ夫ハ出やを
あくてさそうもちまあらうそ　しーぐ
ものるぐてあきこるふ見くてうこのあう
くちふしをぐんぐうのうくれえもあう
をそをそをきて大井の名きふいくう

(狂)　ゆゝくハかをみぐこれよ者くの久の
ヲイ　大井と　うびのえちづ
○この名のさくちやきよ移人えのぶりてきたのそう
かゝ大久くの者くゆるうあけ七り時るやとをとそて
いまぐえちの中ぐもくてきふかつれそうとこく
かうづをふてくちんとそすーさえそうげるさ
かりをるうくれらうみていのさちうひやそうげれ
ありつもるくくぐふうあくうこれまるうて
ゆけどもさをぐよたくぐもうけをおつれておくま
こるるさぐこちこまれぐさきもこちるるりころ
おくふるりされこるうてこそくとやうそも
るどくてこるとのくこをとそれるくむるれぬやうよ
あるこあくやくふうそをみこるくおかひ
こりしぐ坂あけそれをみらうみくこうこも
六十あまうのよがくせーおさうこひるれを

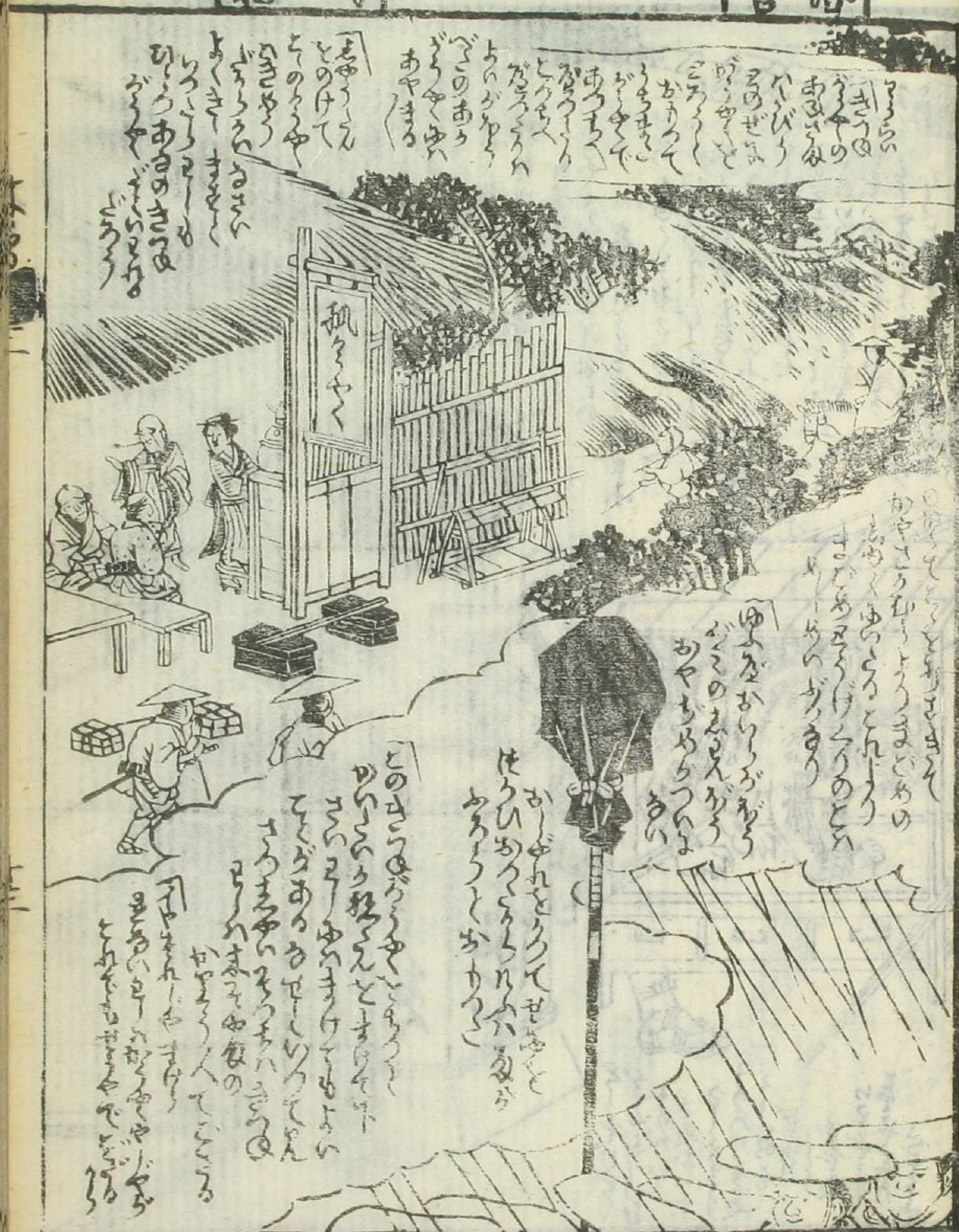
△ひくく移んも
ひさくりえも
五名目まをるそち
この十三そくげの爪
あくくくすとるふ
そぐゆんまくぐ
よ色く移くひよまを
板元口上

どうをいとくろのこうふおくりく
かをうの人よおやのひとくろぐうひ
せーとおかひおくーかしまのおさうこひ
ちくうもそぐめてとをくとくとをけそ
りよやうさそくくえきのそうくくとの
そうげをさそしさそもさとさんくて
とこのれ　ぐふやどをこうてこう
さんくしこうろ　おそくおかいしふ
そのれくがさとくこよくくま
とのそうげをこーくるい
おさーげ色くくれのを
いくれるいのよくくお色
くそれくうきくんくひを
くうあひをくくくうき
せーとくくうき
ーかくるあそそで
さくまくくとの十三
そうげのやうるくぐ
あいとのさくれみ和田
そうげくくふくやも
るいるくおさがあるときく
まくくくかふさくにゆくれくう
おいくあをりくうキを
えるくよくいををつおくとぐあれン
をそるそくれくそもそしかごまのくそ
ゆるくくえんるくくちくくも
くるくふーくのだへるいう

中津川

落合

馬籠



小型の絵

霊験誠訪御桂　十返舎一九作　全六冊近刊

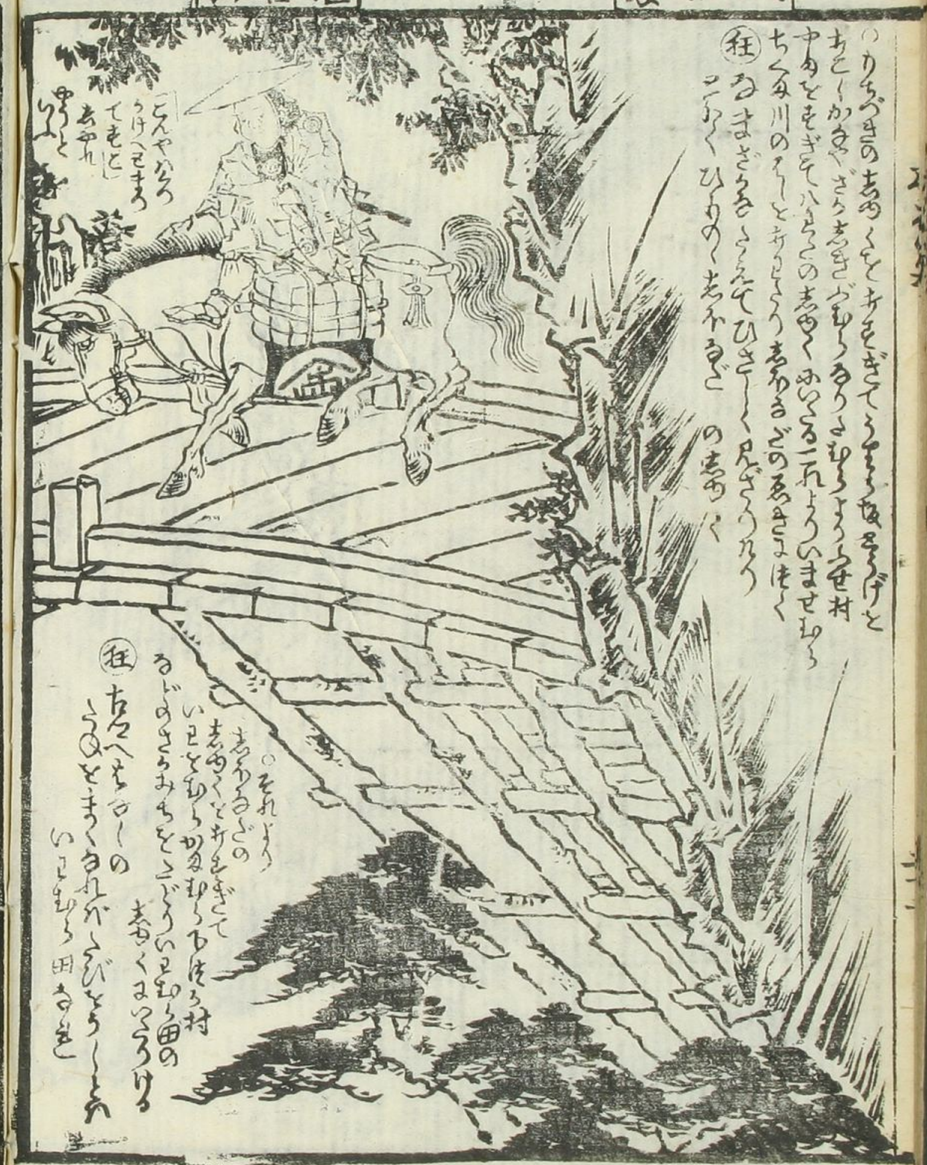
諏訪温泉之圖

秋田峠

長久保

御休所
一ぜんめし
さけさかな

八郎兵



田村岩

小田井

遠分　酒掛

通

安中
板垣
酒

高崎

倉賀野
新町

本庄

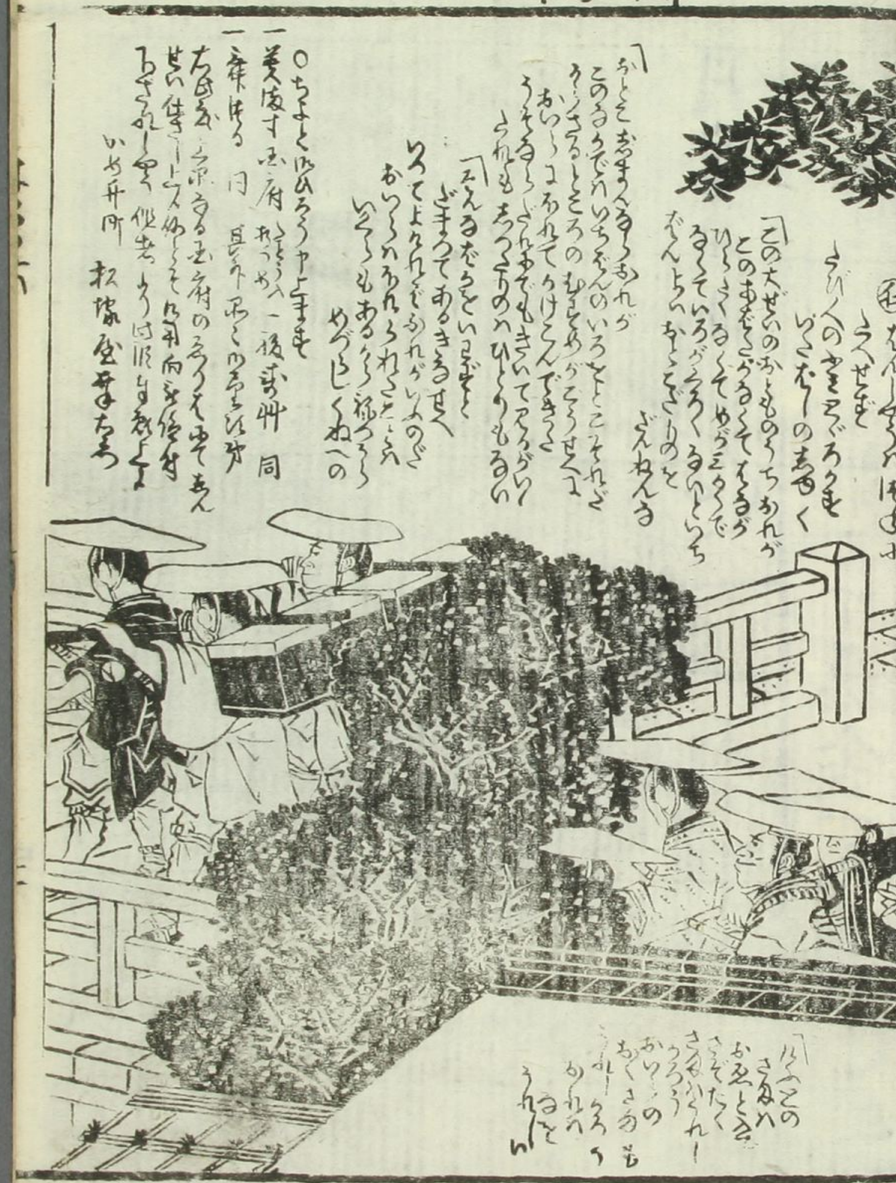
大切ゆく
二八そば

市休所

上尾

大宮
浦和

福
福
清酒看
一せんめし



妙義山霊験記 杉むら月夜 全三冊 十返舎一九著 喜多川月麿画 近刻

十返舎一九賦

夢ものふかさ降る花の
はるかぜも
ふる梅の香ゆ

十返舎一九著 近刻

早稲田大学図書館
011688991830